「花の国道」悲しみ越えて

陸前高田のん 前高田さん 鈴木さん

応援受け植栽再開

県内外から120人参加



ボランティアや地域住民にアドバイスをしながら植栽を楽しむ鈴木勝井さん＝陸前高田市

陸前高田市の国道45号沿いに約1キロにわたって整備され、ドライバーや地域住民に癒やしを与えてきた花壇「フラワーロード陸前高田」。活動を先導してきた鈴木勝井（かつい）さん（79）は3日、津波で亡くなった妻信子さん＝当時（75）＝や活動仲間への思いを胸に、壊滅状態となった花壇への植栽を再開した。悲しみに沈んでいたが、全国から寄せられる支援に心を動かされ、地域再興のために自らを奮い立たせた。

植栽には地元住民や県内外からのボランティアら約120人が集まった。予想をはるかに上回る人数に、鈴木さんは「こんなにうれしいことはない」と満面の笑み。参加者に植え方を助言するなど触れ合いを楽しんだ。

花は県内の園芸愛好家らでつくる被災地支援団体、希望の花いわて3・11（吉川三枝子代表）の協力でパンジー、ビオラの苗約3400個とスイセンやチューリップの球根約1万個が用意された。修復した数十メートルの区間に手分けして植えた。

鈴木さんは中学校教員を退職後、1994年に友人2人とボランティアで整備を始めた。約200メートルから始まり、18年間で約1キロに約1万5千個の苗を植えるまでに拡大。参加者の輪も年々大きくなった。

ようやく花の時季が訪れつつあった3月11日。津波があまりにも多くを奪った。

信子さんの手を引き自宅から数十メートル離れた竹やぶに逃げたが、頭上まで津波に覆われた。右手で竹をつかみ、左手でしっかりと妻の手を握りしめた。しかし、波が引くと妻の姿は見えなかった。

「あと1分早く逃げれば」「もっと強く手を握っていれば」。自分を責める日々が続き、花を植える気持ちにはなれなかった。

前を向くきっかけになったのは9月に招かれた同団体の交流会。「これだけ応援してくれるのに、自分が頑張らないわけにはいかない」と思えた。

植栽で爽快な汗を流した鈴木さんは「花による癒やしは被災地の復興の力になる」と信じる。全国から寄せられる支援への感謝を心の糧に今後も活動を続けていくつもりだ。

岩手日報　H23年11月4日付
※この記事・写真は、岩手日報社の許諾を得て転載しています。